

# 現代のこぼれ

こぼれ  
小原 克博



ウジアラビアの新しいイメージの一つとして国際社会に定着しつつある。

問題を解決するために、けんかや戦争で決着をつけるより、対話する方がはるかに望ましいことは明白である。しかし、なぜ今、「対話」の必要性が国王主導で訴えられているのだろうか。

シンポジウムでも繰り返し語られたが、イスラームはそもそも対話の宗教である、というのが彼らの主張の出発点にある。しかし、実際上の理由としては、

サウジアラビアという国名を聞いたときに何をイメージするだろうか。豊かな産油国、砂漠の国というイメージもあれば、巡礼地メッカを擁するイスラーム国家を連想することもできるだろう。

先月、サウジアラビアからの来訪者や、駐日サウジアラビア関係者ら十数名とともに「イスラームにおける諸宗教間対話の試み」というシンポジウムを開催した。近年、サウジアラビア国王は「対話」を最重要課題の一つにあげている。これは、サ

## 対話する力、させる力

サウジアラビアがオサマ・ビン・ラディンらのテロリストを生み出した国という、国際社会で広まったイメージを何とか払拭したいというのが本音のようだ。そこでは、対話を拒否する非イスラーム的なテロリストと、対話を促進する正統的なイスラームというイメージの対比が見受けられた。

対話に対して開かれた者同士が、対話のテーブルに着くことは何とも難しいことではない。むしろ、相手の価値観を拒絶し、対話を拒む者と、どのように関係を結び結ぶことができるのかが、現代世界における焦眉の課題であることは、イスラエルとハマスの関係を見ても明らかである。対話は絵空事ではなく、人の命と生活を守るために必要なのだ。

そのことを足元の現実を見据えながら示し、共感を得てきたのが、オバマ米大統領ではないかと思う。白人と黒人等の人種的対立という長年の軋轢は言うまでもなく、保守派とリベラル派の間の価値観を巡る近年の対立は「文化戦争」と言われるまで、アメリカ社会を分断することになった。しかし、オバマ氏は、対話不可能なまでの分断の中にも、対話と和解の可能性があることを建国の理念にさかのぼって語り、一つのアメリカ合衆国というヴィジョンを示した。

思わせる力、すなわち「対話させる力」を発揮したことが、アメリカ社会に新たな責任感と希望をもたらしたのではなからうか。

ひるがえって、イスラエルのガザ侵攻に際して、遺憾だ、としか一国の首相が語ることができなければ、その国の「平和主義」とは一体何なのだろうかと思つ。どの国にも増して「対話させる力」を有した実行力ある平和主義が求められている時代に、サウジアラビアやアメリカの変化を横目で見ているだけでは、日本の崇高な理念も絵空事になり果ててしまつだろう。チェンジ(変革)は、我が国においても強く求められている。

オバマ氏自身が「対話する力」を持っていたのは周知の通りである。しかし、それだけでなく、敵対してきた陣営同士の間、ひよつとしたら相手は対話できる存在かもしれないと

(同志社大教授・キリスト教思想)